九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドによる未完のユゴー論 : 百年後の「ユゴー, 残念ながら！」

小坂, 美樹
大阪大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/2203074

出版情報：Stella. 37, pp.255-266, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジッドによる未完のユゴー論
――百年後の「ユゴー，残念ながら！」――

小　坂　美　樹

「ユゴー，残念ながら！ «Hugo, — hélas !»」。文芸誌『レルミタージュ』1902年2月号のアンケート「あなたにとって詩人とは誰か Quel est votre poète ?」に対するジッドの回答である[1)]。この寸言は，その短さと多様な解釈の可能性ゆえに，時には発言者を離れ，時には微妙に表現を変えながら，さまざまな場所で引用されてきた[2)]。ヴァレリーが「今世紀で最も見事な名句」[3)] と称したジッドの言葉は，バカロレア論文の課題にさえなったが，当の本人が発言の真意について語ることはなかった。

アンケートの約40年後，第2次世界大戦のさなか，ジッドはようやく過去の発言を，1941年11月29日の『ル・フィガロ』紙上で取り上げる。この年から翌年にかけてジッドは同紙に文芸評論「架空会見記」（以下「会見記」と略）を連載していたが，その「会見記Ⅳ：過度な称賛，不当な批判」において，当時フランスで相次いで出版されたいくつかのアンソロジーに触れ，それらへの不満，とりわけティエリー・モーニエを名指しにして，ユゴーの評価が不当に低いことを非難する。ユゴーを「広大無辺の詩人，我らがパンテオン最大の偉人」[4)] と持ち上げるジッドに対して，（架空の）インタビュアーは，それならばなぜ「ユゴー，残念ながら！」とかつて発言したのかと尋ねる。ジッドの答えは，歳月の経過を全く問題とせず明快である――

> 私は今でも同じことを言うだろう。ユゴーに対する私の賛嘆の念がいかに大きなものであっても，彼の過剰な悲壮感が私にはしっくりこない。どこでも，いつでも，それがわざとらしく感じられる。意味がないというより，むしろ，ただ韻をふむためだけのような気がしてね。そう，詩句の流れまかせに，いつもとりとめのない彼の思想に，もっと厳格さと真実味があればよいと思う。[5)]

こうして70歳を越えた作家は，32歳の時の発言を追認し説明したわけだが，他方でジッドは当時，『フランス詞華集 *Anthologie de la poésie française*』（以下『詞華集』と略）の編纂を進めていた。同書がガリマール社（プレイアッド叢書）より出版されるのは1949年まで待たなければならないのだが，そこに最も多く採録されたのはユゴーの詩であり，序文でも詩人への言及が繰り返されているにもかかわらず，かつての発言「ユゴー，残念ながら！」については特に触れられていない。そのため，ジッドが過去の一言について考察したのは，長い間，先に挙げた「会見記Ⅳ」のみとされていた。

ところが，『レルミタージュ』への回答から百年，奇しくもユゴー生誕二百年にあたる2002年，ファタ・モルガナ社より『ユゴー，残念ながら！』と題された小冊子が出版された[6)]。『詞華集』序文の準備原稿の一部である。冊子に付されたクロード・マルタンによる短い覚書によれば，公表されたものは，（現在ジャック・ドゥーセ文庫に所蔵されている）序文用の準備資料から切り離され，個人蔵となっていた原稿である。マルタンは，これらの原稿がジッド本人によって切り離された可能性が高いことから，ジッドがユゴーについてのエッセイを計画していたと推測している[7)]。結局，ジッドによるユゴー論がまとめられることはなかったが，この小冊子から，ジッドは「パンテオン最大の」詩人を論じるさい，1902年に発した一言の意味を具体的に語ろうとしていたことが明らかになった。

小論ではまず，冊子前半部を訳出し，執筆時の状況と照らし合わせながら解釈を試みる。後半部については，そのほとんどが『詞華集』序文に用いられたことを鑑みて訳出はせず，序文に用いられなかった部分に焦点を当てる。結論を先取りすれば，同冊子の記述によって，ジッドの従来のユゴー観が大きく変わることはない。しかしながら，今でも独り歩きを続けるジッドの言葉について，その発端や発言時の状況を確認しておくことは無駄ではあるまい。この小冊子を，『レルミタージュ』（1902）での一言を起点に，「会見記」（1941-1942）と『詞華集』（1949）序文とを重ねながら読むことで，ジッドが「放言 boutade」[8)]と呼ぶ短いユゴー評について検討したい。

『レルミタージュ』アンケート

ジッドの寸言の発端は，先述のように『レルミタージュ』によるアンケート

である。1902 年 2 月号の特集「詩人たちの詩人 Les poètes et leur poète」には，120 を超える回答が筆者のアルファベット順に並べられている。単に「我が詩人」の名のみを挙げる者はジッドを含め四名にとどまり，大半の回答には選択の理由が付されている。回答の分量も，数行から数頁にわたるものまでとさまざまで，韻文形式の回答なども見受けられる。概して饒舌な回答のなかで，確かにジッドの回答はその短さにおいて目を引く。だが，短いだけでジッドの一言が有名になったわけではない（最も短いのは，ポール・フォールの回答「ユゴー」）。頭韻をふむかのように語を組み合わせたジッドの回答は含意に富み，ユゴーの名に続くヴィルギュルに長いティレ，最後の感嘆符といった表記上の効果[9] も加えて，多くの解釈を呼び込む。そして何よりも，この一言が当時の文壇におけるユゴーへの評価を的確に表していたからである[10]。

ただし，おそらくすべてのアンケート同様，『レルミタージュ』のそれも中立的ではない。その実施の背景には，前年の『メルキュール・ド・フランス』12 月号に掲載されたレミ・ド・グールモンによる論考「ヴィクトル・ユゴーに言及したジャーナリストへの短い助言」[11] があった。グールモンは，「〈ユゴーは 19 世紀の詩のすべてであり，19 世紀の思想のすべてであった〉と書いてあるのを最近読んだが，そのようなことを吹聴するのはやめてもらいたい。このような総括はまこと不遜に過ぎる」[12] として次のように続ける――

> ヴィニー，ラマルティーヌ，ミュッセ，ボードレール，ヴェルレーヌ，さらに 19 世紀初めから終わりまでの幾人かの詩人なくして，前世紀の「詩のすべて」と言えるだろうか。私としては，当代の詩人 200 名に〈貴殿にとって詩人とは誰か〉と尋ねてみたい。そうすれば，はっきりするだろう。「詩のすべて」いや違う。パイプオルガンが音楽のすべてではないのと同じだ。大オルガンはバイオリンではないのだから。[13]

『レルミタージュ』1902 年 2 月号は，上記論考の一部を引用し，自誌のアンケートを「文学史において有益であるのは確か」[14] と正当化，体裁上 19 世紀の詩人すべてを対象としているが，実際のところそれはグールモンの記事に依拠し，「ユゴーについてどう思うか」と問うているのである。回答を寄せた詩人たちの大半がユゴーについて多かれ少なかれ言及していることは，彼らがアンケートの質問を正しく読み替えたことを示す。その結果，「我が詩人」として最も多く票を集めたのはユゴーであった。ジッドの回答もまた，『レルミタージュ』ひい

てはグールモンからの質問の意図を解釈したうえでのものと言えよう。ゆえにいっそう，この「残念ながら！」の意味するところは興味ぶかい。なぜなら，ここにグールモンに対するジッドの複雑な感情を読み取れるからである。

先に引用した『メルキュール・ド・フランス』の記事からも明らかなように，グールモンは，ユゴーを荘厳なオルガンに譬えることでひとつの権威と認めてはいるものの，絶対的な存在とは考えていない。実際，この象徴主義者は『レルミタージュ』のアンケートに対して，自分ならばマラルメを選ぶとしている[15]。ジッドはグールモンのそうした文学的立場を知りながらもユゴーの名を挙げた。それが『メルキュール・ド・フランス』主幹による論考への反論となることは，おそらく十分に承知したうえで。

ジッドとグールモンの関係は，前者の後者に対する「どうしようもない嫌悪感」[16]という表現に集約される，いびつなものであった。ジッドの文学デビュー以来，その才能を認め理解を示すグールモンに対して，若い小説家は10歳上の批評家の確かな鑑識眼には敬意を払っていたものの，本人を前にすると気づまりを感じ，敵意を抑えることができなかった[17]。

「会見記」においてジッドは，ユゴーを「我が詩人」として選んだけれども，その詩には手放しで称賛できない難点があり，それゆえに，かつて「残念ながら」と言ったのだと説明している。確かに，ジッドは少年期から青年期にかけてユゴーに熱狂しつつも，さまざまな場所でロマン派巨頭の極端な誇張表現を「許しがたい趣味の悪さ」[18]と非難してきた。「会見記」での説明とジッドのユゴー観の間に矛盾はない。しかし，その同じ「会見記」においてジッドは，ユゴーの膨大な作品ではなく，ボードレールによる一冊の小詩集の側につくと述べているではないか[19]。ジッドの詩学に照らせば，ユゴーは決してただ一人の「我が詩人」ではないのである。アンケート当時，ジッドが自らの詩学に反してでもユゴーを選んだのは，その背後にいるグールモンと意見を同じくしたくないという個人的な感情も含まれている可能性がある。件のアンケートだけがきっかけとは考えにくいが，まさにその直後の1902年3月，ジッドは年長の批評家に対し，「あなたは私が最も嫌悪する精神の持ち主の一人である」[20]と，驚くほど強い口調の手紙を送っている。その詩の問題点にもかかわらずユゴーを選ぶことは，グールモンに代表される反ユゴーの時流に乗らないためでもあった。ジッドの回答「残念ながら！」には，そうした文学内外の様々な感情が反

映しているのではないだろうか。ちなみにジッドは，こうした文芸誌によるアンケートを「時間の無駄」として決して好んでいなかったし[21]，『レルミタージュ』編集長エドゥアール・デュコテが，アンケート嫌いを表明していたにもかかわらず，自誌では宣伝目的でそれを行ったという内部事情もジッドにとって喜ばしいことではなかったはずである[22]。

小冊子『ユゴー，残念ながら！』(2002)

「会見記」とほぼ同時期に書き進められたと考えられる『ユゴー，残念ながら！』において，ジッドはかつての発言をさらに詳しく説明している。小冊子は全体で 30 頁ほど，大きく 3 つに分かれている。まずは小冊子前半の比較的短い記述 2 つを順に訳出する。この前半部は，後半部の大半が，順序や表現の変更はあるものの，ほぼそのままの形で『詞華集』序文に移されているのとは対照的に，序文には（少なくとも文字通りには）用いられていない――

> さまざまな出来事のために，仕事が中断してしまっていた。しかし今がまさにその時だ。私は大きな間違いをおかすところだった。あらためて，「それでは詩とは何なのか」が問われている。この問いはいつでも有効だ。世代が新しくなるたびに問われるのだから。あなた方の次の世代，つまり，今日の若者，今ひと時の間，表舞台に立っている者たちにとっても「詩とは何か」が問題となるのは間違いない。若者は常に正しい。しかし，その若者たちを前面に担ぎ出してくる「斬新さ」というのは，奇抜さを失えばあっという間に色あせてしまう。あなたたちにとっても同じことが言えるだろう。演劇に譬えれば，照明は，舞台のあちらこちらを照らしはするが，一度には一握りの役者たちにしか当たらないので，舞台上のほかの役者たちは影のなかに沈んでしまう。こうなると少し前までスポットライトを浴びていた者たちのことは，もはや見分けることすらできない。さらには，そうして見えなくなってしまった役者たちの何が自分たちの心をとらえ，すばらしいと思わせたのかもさっぱり分からなくなる。ごく少数の偉大な先駆者たちのみが，この無知と無関心と忘却の波から逃れることができる。先駆者をまねるだけの追従者たちはこの波にのまれてしまうだろう。詩が喚起しようとするあの超自然的な熱狂の境地……新世代の若者たちが，かつて我々を心酔させたものを，どれほどに否認あるいは軽蔑することができるのかについて確認するのもなかなかに興味深いことだろう。彼ら若者の視点に立てば（私は生まれつき共感能力が高いので，こうして彼らの立場に立つのはたやすいのだが），そうすると，たちまち私にはユゴーが全く理解できなくなってしまう。ユゴーの作品全体においても，もはや修辞のみしか見出せないし，大仰な言葉で無駄に騒ぎ立てているようにしか思えない。ついには，ユゴーの無意味な雄弁にかつて自分が夢中であったことに驚いて

しまう。今日，私は自問する：ユゴーのこうしたすべては何なのかと。神秘にも，本物にも，本質にもまったく触れていないユゴーの詩句は一体何なのかと。何において，何ゆえに，私はユゴーの詩に心揺さぶられたのだろうか。ユゴーの最も驚異的なまでに成功している詩句さえも，したがって，香具師の巧みな口上ほどにしか私の琴線にふれることはない。『サタンの終り』や『神』にある実に驚嘆すべきアレクサンドラン，それらが私の心を強く打ったのは，まださほど昔のことではないのだが，もはや，それらは曲芸としか思えない。もう終わったのだ。興味も愛着も失ってしまったのだ。かつて私が言った「ユゴー，残念ながら！」のうち，「残念」のみが今も意味を持っている。この「残念」が今や，私たちがユゴーの詩句に感じた熱い思いを遠くへ運び去ってしまうのだ。[23]

準備原稿ゆえに十分に練られていない箇所もあるが，「会見記」および『詞華集』序文を合わせて読めば，解釈は特に難しくはない。

まず冒頭の「出来事」とは，言うまでもなく第二次世界大戦を指す。『詞華集』の企画をジッドが引き受けたのは戦争前の 1937 年。しかし，膨大な仕事量や協力者探しの難航などにより作業はなかなか進まない[24]。また 1938 年には妻マドレーヌが死去し，ジッドは「生きる意欲を喪失」[25] してしまう。これらの個人的な事情に加え，第二次世界大戦の勃発により，ジッドはパリさらにはフランスから離れることを余儀なくされる。『詞華集』が世に出るためには実に十余年の歳月が必要であった[26]。

そうした時代状況のもと，準備原稿ではまず「詩とは何か」という問いが提起される。これはまさに『詞華集』序文のエピグラフに英語のまま引用されたボズウェルの言葉 «what is poetry ?»[27] に対応している。また，この問いは，英国詩人ハウスマンと交わした会話の思い出から，フランス詩を定義する必要性が述べられる序文冒頭部へとつながる。エピグラフには 1776 年，ハウスマンとの思い出は 1917 年と具体的な年号が付されているため，序文が戦時に執筆されていることは前景化しない。一方，準備原稿には，占領下のフランスにおいてジッドが抱いた自国文化への強い危機感が刻みこまれているのは，次に続く「大きな間違い」とある一文からも窺える。これと類似した表現が 1942 年 5 月 2 日の『ル・フィガロ』掲載「会見記XVI：詩について，さらにそしてこれからも」において用いられている――

フランスの内奥にある真の価値を，今日のフランスの表面にあらわれるもののみから

評価してしまうと，我々は大きな間違いをおかすことになるだろう[28]。激しくゆさぶられた壺のなかで――ちょうど我々がそのような状態であったのだが――表面にまず浮かび上がるのは，最も軽いものであって，最もよいものではない。[29]

ジッドがここで語っているのは，フランスの新世代の詩人と詩の奥深さについてである。しかし実際に新聞に掲載されたのは上記引用の始めの一文のみで，壺の比喩を用いたくだりは検閲により削除された。純粋な詩論として読むことができるこの文が検閲の目にとまった事実は，「会見記」が政治的文脈においても読まれていたことを示す[30]。準備原稿で「大きな過ち」をおかすのは「私」であり，「会見記」では「我々」となっているが，当時のジッドが占領下のフランスにおける文化的危機に直面し，詩をフランス精神のよりどころとして『詞華集』を準備していたことが読み取れる。

次に，時事的な問題を離れ，ジッドは世代論を展開する。印象的な演劇の比喩は用いられていないものの，世代による詩の評価の変化というテーマは，序文でも扱われ，そこでは世代差の例としてジッドが戦時中滞在したチュニジアでの体験が語られている。現地の高校では，ユゴーの詩が軽蔑の対象となっており，優秀な学生でさえユゴーの良さを認めようとせず，「アレクサンドランはもはや僕たちの興味を引かない」[31] と言うのだ。準備原稿では突然ユゴーの名が出てくるので，唐突な感じは否めないが，序文から類推すれば，ここでの世代論は，ユゴーに関するジッドの実体験が下敷きになっていたことが分かる。準備原稿同様，序文でも，チュニジアでのエピソードの後，老ジッドは，高校生の気持ちに同化し，若い時分に熱狂したユゴーが今や全く理解できないことを告白している。

「会見記」におけるジッドのユゴー批判はかなり率直なものであった。それは『詞華集』序文においても同様である。表に出ることのなかった準備原稿では，ユゴーの詩はよりいっそう厳しい語彙や比喩によって難じられていた。次に訳出する原稿でも，ユゴー批判は相当に辛辣である。称賛しながらも，ユゴーは「詩人 poète」ではなく「詩作者 versificateur」とされ，文中には「欠点 défaut」の語が頻出する。先の原稿では最後に登場した「ユゴー，残念ながら！」の一言が，ここでは冒頭に置かれ，状況も含めて詳しく説明される――

「ユゴー，残念ながら！」とかつて私は書いた。それはあるアンケートへの答えで，作家や詩人に「あなたにとって，フランスで最も偉大な詩人は誰か」と問うものであった。（どの詩人が好きかといった，好みの問題ではまったくなかった。）

レミ・ド・グールモンは，私の「ユゴー」「残念ながら」のたった二語のなかに，ユゴーへの正当な賛辞とまっとうな批判を同時に読み取った。彼のおかげで，私の放言は大いに受けた。あらゆるところで引用され，じきに誰の言葉か忘れられてしまった。名誉の極みである。一度ならずも，バカロレア論文の課題として出されすらしたのだ。この「残念ながら」の意味するところを私自身が説明するのは悪いことではなかろう。

ユゴーが長い人生を通して自らを比類なき詩作者として生きたことについて，私は賛嘆の念を抱いている。しかし，その思いがどれほど大きく揺るぎないものであっても，私はユゴーの並外れた欠点を無視することはできない。こうした欠点のために，ユゴーの評価は昨今著しく低下しているのだ。まだほんの幼いころから，私はユゴーの詩の欠点に気づいていた。おなじみの誇張，強引な反証，実に美しく大胆なメタファーが繰り広げられるその下には，ほぼ常に不誠実さが透けて見え，また，思考は不十分で，絶え間なく形式に振り回されているかのようであった。こうしたユゴーの欠点は私を困惑させた。私の戸惑いは，ほとんど無意識なものではあったが，ついにはユゴーの詩句がもたらす素晴らしい高揚感に身をまかせることができなくなってしまった。ユゴーの最も素晴らしい詩句ですら，私にはわざとらしい作り物のように思われた。あたかも，それらの詩句は，産みの苦しみを経ずに生み出され，まるで遊びであるかのように，それも私たちをもてあそんでいるかのように思われた。私は騙されるのは好きではなかった。それから随分と月日が経った。私もどうやら，作者に対して，その人にはない美徳を強く求めたり，人として立派でなければならないなどと考えるのではなく，その作者なりのよさを認められるようにはなった。つまりユゴーは，その途方もない欠点にもかかわらず，それで私の賛嘆の念が減るわけではない。欠点がないということは，美点ではないのだから。[32)]

この原稿の正確な執筆時期は小冊子には示されていない。しかし，文中にある「正当な賛辞とまっとうな批判 juste éloge et juste critique」という表現と「会見記Ⅳ」のタイトル「過度な称賛，不当な批判 Outrelouanges, injustes critiques」との照応，また，「会見記」，準備原稿ともに，まずユゴーへの「賛嘆の念 admiration」を語り，続いてユゴーの詩の欠点を批判するという構成の類似，さらにはバカロレアの出題が 1942 年であることから，執筆は 1941 年から 42 年頃と考えられる。

冒頭では，発言の発端であるアンケートについて説明される。『レルミタージュ』の名が示されないのは，同誌が 1906 年にすでに廃刊となっていたからであろう。アンケートは，「あなたにとっての詩人」を尋ねるものであったが，こ

こでは「フランスで最も偉大な詩人」となっている。単純な記憶違いかもしれないし，いずれの問いに対しても，同じ答えとなることもあろう。しかしジッドの場合，この違いは決して小さくない。そのことをアンケート後すぐに指摘したのが，同稿で次に言及されるレミ・ド・グールモンである。彼は自誌『メルキュール・ド・フランス』3 月号で，アンケートが，19 世紀の詩人で「最も〈賛嘆〉に値するのは誰か」と「最も〈好き〉なのは誰か」という二重の問いになっていると明言し[33]，続けてジッドの回答を取り上げ，「アンドレ・ジッド氏による〈ユゴー，残念ながら！〉の回答は，この内面の葛藤を非常によく表している」[34] と評する。つまりジッドの回答は，「ユゴーに賛嘆の念を抱いてはいるが，好きではない」と純粋に文学的な問題として解釈されているのである。先に，ジッドの回答には 1902 年当時グールモンへの反発が含まれている可能性を推測したが，40 年後のジッドは，この批評家について言及こそしているものの，彼がアンケートの発端であることには触れていない。歳月の経過によって，グールモン（1915 年にすでに死去）との確執が記憶の底に沈んだのか，あるいは検討に値しないと判断したのかは分からない。確かなことは，アンケートから 40 年後にジッドが自身の一言を説明するとき，それは結果として，かつて嫌悪した批評家の解釈に従う形になっていることである。ジッドは，『レルミタージュ』の質問を微妙に変え，「賛嘆」のみに焦点を絞ることで，グールモンが提示した問いの二重性を否定する。わざわざ「好み」の問題ではないと断っているところに，たとえそれが無意識の記憶違いであっても，グールモンへの反感の名残を見るのは行き過ぎであろうか。

未完のユゴー論

小冊子『ユゴー，残念ながら！』の 3 番目の原稿すなわち後半部は，先述のように，その大半が『詞華集』序文に用いられた。残されたのはごくわずかだが，まさにそこで，かつての発言が取り上げられている。その内容は 2 番目の原稿とほぼ同じで，発言がアンケートの回答であること，レミ・ド・グールモンにより世に知られるようになったことなどが繰り返される。ただしバカロレアについては，2 番目の原稿よりも具体的である――

〔この「残念ながら」について〕バカロレア受験生たちはコメントしなければならな

かったのだが，それは言うまでもなく，まずはユゴーの反論しようのない優越性について十分に証明してからのことである。しかし，その優越性そのものが，ごまかしのうえになりたつものであり，詩的横溢をさまたげるようなあらゆるものを考慮しないことで成立しているのだ。[35)]

ユゴーが他の詩人よりも偉大であることは確かだが，ユゴーをその高みに押し上げているものは必ずしも偉大ではない。バカロレアを受ける高校生すなわち若者に託して，ジッドは自分の考えを述べるのである[36)]。

小冊子の内容は以上の通り。発言から百年，活字となった原稿によってようやく，40 年にわたるジッドの長い沈黙は忘却ではなかったことが確認できた。ユゴーについて語るさい，ジッドはかつての発言を具体的に説明しようと試みていたのだ。

ジッドは，アンケートの回答においてユゴーの名を挙げ，「会見記」でユゴーを持ち上げ，『詞華集』ではユゴーの詩を最も多く選び入れた。「ユゴー，残念ながら！」には，称賛と批判という両極端な要素が並存しているが，公になったジッドのユゴー評は，常に留保が伴うとはいえ，称賛の側に比重がおかれている。一方，厳しい言葉が並んだユゴー批判の多くは，準備原稿のなかにとどまり世に出ることはなかった。

『レルミタージュ』では，グールモンに代表される当時の反ロマン主義のなかでの低いユゴー評価に対抗するため，ジッドは「我が詩人」としてユゴーを選んだ。『詞華集』においても，当時のフランスの文化的危機と他のアンソロジーにおけるユゴーの過小評価に抗うべく，ユゴーに最大の地位を与えた。ジッドの選択には，いずれの場合も，反ユゴーの時流に乗らないというバランス感覚が働いている。そしてその結果，ジッド自身の詩学はいわば犠牲となり，ジッドがユゴーの詩に対して感じていた否定的な部分は公表される機会を逸してしまったのである。

もし準備原稿を含めたユゴー論をジッドがまとめたのであれば，そうした時代状況とは無縁の，ジッドの詩学のみを基盤としたユゴー論が出来上がったのかもしれない。確かに，『詞華集』序文を読めばジッドのユゴー観はかなり具体的に理解できる。しかし『詞華集』の出版からすでに 70 年近く経ち，2000 年にはプレイアッド叢書より新たな『フランス詞華集』が編まれた。ジッドの『詞

華集』が参照されることは少なくなるであろうし，それはジッドの寸言が独り歩きすることをさらに後押しするであろう[36)]。そのたびに我々は，この小冊子に立ち返り，ジッドのユゴー観について確認していく必要がある。

註

1）*L'Ermitage*, février 1902, p. 109. « hélas ! » の日本語訳は堀口大學のもの（堀口訳，アンドレ・ジイド『架空會見記』，鎌倉文庫，昭和 21 年，87 頁）。この感嘆詞のもつ多義性を確保するためには，「ああ！」と訳すのが適当と考えるが，ジッドの言葉がすでに「名句」として定着していることから，堀口の訳語を引き継いだ。

2）Voir Justin O'Brien, « Hugo, — hélas ! », *The French Review*, vol. 37, n° 5, April 1964, pp. 554-556.

3）原語は « Le plus beau mot du siècle »（ジッド宛書簡 1923 年 10 月 8 日付。*Correspondance avec Paul Valéry (1890-1942)*, nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter Fawcett, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » 20, 2009, p. 859）。

4）André Gide, *Interviews imaginaires*, « IV. Outrelouanges, injustes critiques », in *Essais critiques*. Édition présentée, établie et annotée par Pierre Masson, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, p. 332.「会見記」さらには『詞華集』でも批判の対象となったモーニエによるアンソロジーは次の通り――Thierry Maulnier, *Introduction à la poésie française*, Paris : Gallimard, 1939.

5）Gide, *Interviews imaginaires*, IV, in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 333.

6）André Gide, *Hugo, hélas !*, Fontfroide : Éd. Fata Morgana, 2002.

7）前掲書にはさまれた « Note par Claude Martin » を参照のこと。

8）Gide, *Hugo, hélas !*, *op. cit.*, pp. 11 et 22.

9）Voir O'Brien, art. cité, p. 556.

10）Voir Michel Lioure, « Hugo, — hélas ! (Gide et Hugo) », in Catherine Mayaux (éd.), *La réception de Victor Hugo au XXe siècle* (actes du colloque international de Besançon, juin 2002), Lausanne : L'Âge d'homme, 2004, pp. 57-70.

11）Remy de Gourmont, « Brefs conseils à un journaliste touchant Victor Hugo », *Mercure de France*, n° 144, décembre 1901, pp. 768-770.

12）*Ibid.*, p. 769.

13）*Idem*.

14）*L'Ermitage*, février 1902, p. 82.

15）Remy de Gourmont, « Victor Hugo et les poètes d'aujourd'hui », *Mercure de France*, n° 147, mars 1902, p. 767.

16）Auguste ANGLÈS, *André Gide et le premier groupe de « La Nouvelle Revue Française »*, t. II, Paris : Gallimard, 1986, p. 35.
17）André GIDE, *Journal*, t. I : 1887-1925. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1996, p. 424.
18）André GIDE（éd）, *Anthologie de la poésie française*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1949, p. 33.
19）GIDE, *Interviews imaginaires*, IV, in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 333.
20）Voir Alain GOULET, « Remy de Gourmont vu par André Gide », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 154, avril 2007, p. 215.
21）Claude MARTIN, *André Gide ou la vocation du bonheur*, t. I : 1869-1911［seul paru］, Paris : Fayard, 1998, p. 384.
22）André GIDE - Édouard DUCOTÉ, *Correspondance (1895-1921)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre LACHASSE, Centre d'Études Gidiennes, 2002, pp. 221-222.
23）GIDE, *Hugo, hélas !*, *op. cit.*, pp. 7-9.
24）Pierre MASSON et Jean-Michel WITTMANN（dir.）, *Dictionnaire Gide*, Paris : Classiques Garnier, 2011, pp. 37-38.
25）André GIDE, *Journal*, t. II : 1926-1950. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1997, p. 610.
26）『詞華集』の出版（1949 年）に先立ち，序文が『詩論』のタイトルで 1947 年に発表された（*Poétique*, Paris / Neuchâtel : Ides et Calendes, 1947）。
27）GIDE（éd.）, *Anthologie de la poésie française*, *op. cit.*, p. 7.
28）GIDE, *Interviews imaginaires*, « XVI. Poésie encore et toujours », in *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 386.
29）*Ibid.*, p. 1097.
30）Voir Jocelyn VAN TUYL, « Les messages tacites des *Interviews imaginaires* : décryptage d'un code intertextuel », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 113, janvier 1997, pp. 25-41.
31）GIDE（éd.）, *Anthologie de la poésie française*, *op. cit.*, p. 39.
32）GIDE, *Hugo, hélas !*, *op. cit.*, pp. 11-13.
33）Voir GOURMONT, « Victor Hugo et les poètes d'aujourd'hui », art. cité, p. 765.
34）*Idem*.
35）GIDE, *Hugo, hélas !*, *op. cit.*, pp. 22-23. Voir aussi Jocelyn VAN TUYL, *André Gide et la Seconde Guerre mondiale. L'Occupation d'un homme de lettres*, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 2017, p. 136, note 74.
36）ごく最近では，2018 年 3 月にパリのル・ラヌラグ劇場（Théâtre Le Ranelagh）で行われた演劇のタイトルが « Hugo, hélas ! … » であった。